

鎌倉期三論宗における「仏性縁起」解釈について

奥野光賢

(一)

龍谷大学大宮図書館には、『三論宗判談集』なる写本が所蔵されている。同図書館には三本の『三論宗判談集』写本が所蔵されているが、それらはいずれも同一系統のもののようにあり、そのうち一本の巻末には「文化十二年（一一八五）沙門圭雄」という署名がある。私が閲覧させていただいた限りでは、他の二本もその状態から推して同時期の写本と見て誤りはないようである。

『三論宗判談集』は、その具名を『八幡宮勸学講一問答抄』³ といひ、南都手向山八幡宮の勸学会に於て三論学匠の論究して得た結果を集成したものと伝えられている。『日本大蔵經』『三論宗章疏』は、文政九年（一一八六）筆写の長谷宝秀師所蔵の『八幡宮勸学講一問答抄』を底本に、前の龍大本を対校本としてこれを活字化しているが、本書を初めて学界に紹介したのは島地大等博士であった。

すなわち、博士はその著『日本仏教教学史』において、本書（『三論宗判談集』＝『八幡宮勸学講一問答抄』）を中観澄禪（一二三七—一三〇七）の『三論玄義檢幽集』（弘安三年、一一八〇年成立）に匹敵する鎌倉時代を代表する三論宗の名著と評価された上で、これを次のように紹介されたのである。

その論述の形式内容共に極めて秩序正しく、老練の大家に非ざればなし能はざるの面目を顕している。その分量の点から云へば論集の論草文学に比して餘りに簡に過ぎ貧弱の嫌なきに非ざれども、質より云へば可なり豊富なもので、内容の一般的傾向は三論正統の義趣を宣明するに努めている。但し如何なる説に關しても反対説を容るの餘地を残して居り、是れは素より三論宗学風の遺風ではあるけれども、又時代教学の影響の甚深なることを表はしているものである。謂はゆる三論宗風の特色は対縁仮説に立つものであつて、如何なる教義にも捕らはれ

す、固執せず、機縁に応じて教説を組織するの風である。又立題の次第生起等はその依るところ如何を詳かにしてをらぬけれども、適当に組織化するならば三論教学の主要な問題は凡て網羅せられてをり、是れによって一部の三論学概論を作製することはしかく困難ではない。殊に本書は種々の点から観て鎌倉時代の晩期に出来上つたものと考へらるるが故に、是れによって時代三論教学の正統的方面を知る文献として最も貴重なものである。

島地博士が『八幡宮勸学講一問答抄』という具名を承知されながらも、別名の『三論宗判談集』の名をもって本書を学界に紹介されたのは、おそらくは『三論宗判談集』という名の方が研究者を初め、広く一般の読者には認知されやすく、その書名から受けるインパクトも強いものがあるという判断が働いたためであろう。小稿はこの『三論宗判談集』「仏性縁起」を手がかりとして、鎌倉期三論宗における「仏性縁起」解釈の一斑を素描してみようとすることに過ぎない。

(11)

さて、『三論宗判談集』(『八幡宮勸学講一問答抄』、以下本稿では便宜的に『三論宗判談集』の名を用いる)の第七十四には、「仏性縁起」と題する次のような問答が収められている。

「七十四 仏性縁起」

問。宗家意。中道仏性縁起六道果報可云耶。

答。可有二義也。

両方。若云縁起者。凡中道仏性者是非因非果。非染非浄之法体也。争可縁起六道生死之染法耶。若依之爾者。見涅槃經云云。是一味藥隨其流有六種味【文】。明知中道仏性縁起六道生死法云事。進退不明如何。

答。凡真如縁起不縁起者。月氏及異解。震旦分異轍。而宗家広探經論之意。釈染浄縁起出四種差別。其中第三句真如縁起之旨。實(異本)誠以明鏡也。所謂如楞伽說。藏識海常住境界風所轉。種種諸識浪騰躍而転生。如海水起波浪。非異非不異。仏性亦爾。心但和合生亦非異非不異。如是一切。故知真妄和合方起染浄【文】。

其心分明也。但於一切疑難者。仏性本是以非因非果故。能縁起生死因果之諸法也。非天非人故能天能人也。況於眞如有不守自性義。故能縁起生死染法。亦有不失自性義。故遂不失仏性也。不可有相違。(『日本大藏經 新版』第六二卷・八二下 八三上、括弧内は同本の割注)

記述が簡略に過ぎて理解しがたいところもあるが、まず冒頭の問答では、「中道仏性」は六道の果報を縁起するか否かということが問題とされていることがわかる。答者はこれに対して「二義」があるとしているが、冒頭の「中道仏性縁起」の

語は後文の「真如縁起・(真如)不縁起」と明らかに対応するから、「中道仏性縁起」とは「真如縁起」と同意であり、したがって「答」にいう「二義」とは、後文にある言葉に従えば「真如有不守自性義」と「(真如)有不失自性義」ということになるであろう。そして前者が「真如縁起」、後者が「真如不縁起」を意味することは比較の見易いことであると思われる。

続いて議論は『涅槃經』「如来性品」の有名な「味菓の比喻」が引用されて展開されているが、答者は「真如縁起・不縁起(仏性縁起・不縁起)」の問題は西域より異解があり、中国でもその解釈が分かれたところであるが、三論一家では広く経論の意を探って「染淨縁起」を解釈して四種の差別を出したといい、さらにその第三句目には「真如縁起」の旨が説かれているから、まことにその文をもって明鏡とすべきである、といっている。ここで答者が「真如縁起」の明鏡とする文は、『勝鬘宝窟』卷下之末の次の記述がそれに相当する。いま吉蔵(五四九 六三三)が「経論の中に染淨縁起を釈するに要は四別あり」とする箇所全体を示しておこう。

然経論中染淨縁起要有四別。一約縁不約仏性。二約仏性不約縁。三亦約縁亦約仏性。四不約縁不約仏性。

一約縁不約仏性者。只由六七妄縁。不由如来蔵。此小乘教及大乘教相中。彰染淨縁中因果自招感故有。都不言由蔵実而有。如是一切。

二明約仏性不約縁。染淨之興。只由蔵実。不言從縁而有。此如楞伽説。六七非受苦樂。非涅槃因。蔵識受苦樂。是涅槃因。如是一切。今此説二同彼也。

三明亦約縁亦約仏性者。此亦如楞伽説。蔵識海常住。境界風所転。種種諸識浪。騰躍而転生。如海水起波浪。非異非不異。仏性亦爾。心俱和合生。亦非異非不異。如是一切。故知真妄和合。方起染淨。海水起波浪非異非不異者。彰不可水外求波。波外求水。故言不異。而波息水靜。故言非不異也。仏性亦爾。心俱和合生非異非不異者。彰仏性と六七妄心和合生時。不可真外求妄。妄外求真。故言不異。而妄尽真顯。故言非不異。亦可在縁常靜。故言非不異。法華論云。不即衆生界。不離衆生界。有如來蔵性。故経言。仏性雖在陰界入中。而不同陰界入也。四不約縁不約仏性者。実相之外無縁故。無染淨法可起。此如金剛波若論説。平等眞法界。仏不度衆生。以無仏為能度。無衆生為所度。又如仏地論説。煩惱妄想中。無一法可滅。清淨法中。無一法可増。混上三門。歸乎一絶。(大正蔵三七・八三下 八四上)

この『勝鬘宝窟』の記述はのちに検討することとして、『判談集』後文を見てみると、ここでは「真如有不守自性義」も「(真如)有不失自性義」も最終的には「不可有相違」と述べられているところから、本書の著者は両者は終極的には同じ

「この表裏に過ぎないと主張しているものと判断される」ところで、この時期『三論宗判談集』『仏性縁起』と同様、この問題を扱った文献に『三論真如縁起事』がある。本書も島地博士が初めて学界に紹介されたものであるが、同書は三論教学における真如縁起の問題を問答形式で論述した単著であり、『判談集』『仏性縁起』に比べてより詳しい議論が展開されていて注目される。また説かれていた内容から判断すると、島地博士が指摘されたように、『判談集』以後の成立と見て特に問題はないようである。『真如縁起事』は多くの経論からの引用によって構成されているが、これは本書に限らず当時の文献に共通して見られる一般的な傾向のようである。¹⁴⁾

さて、『真如縁起事』には、『判談集』が三論宗は「真如縁起（仏性縁起）」を説いている明鏡であると指摘した『勝鬘宝窟』の一連の箇所を意識した次のような記述がある。¹⁵⁾

難云、勝鬘宝窟明縁起分四別中、第三是真如縁起也云事。道理未明。所以者何。至第三真妄和合。重引藏識海常住境界風所転等楞伽文。明縁起道理。是真妄依持之趣也。都不明真如縁起之旨。故同下卷明依持道理云。此則明有仏性衆生故得種苦。非是仏性令其種苦。亦明有仏性衆生令其厭苦。非是仏性令其厭苦。如有海水風吹成浪非是海水令其成浪（文）。爾者海水成浪喩。專明依持義理。非縁起譬喩乎。

依之淨影大師八識章明真妄依持之義。引楞伽今文為証。故妄之依真如波依水。真之持妄如水持波故。楞伽云。譬如巨海波斯由猛風起洪波鼓浪。無有斷絕時。藏識海常住境界風所動。種種諸識浪騰躍而転生。此明大海雖為風飄水性不移。性不移故名為常住。性雖常住而波水隨風波轉。喻彼真識雖為妄想境界風動。真性不變。性雖不變而彼真性隨妄境起於七識。如海波浪（文）。此正明真妄依持而真性不転之義。爾何以此譬喩成真如縁起乎（是一）。

次大論文不許真如縁起也。故有伝云。大論文。有為法実相即是無為無為相者則非有為者。謂有為法本來空無故即是無為。如空華本來不數故即是虚空。故云実相。此実相即是無為。此故無真如縁起之理（云云）。爾者今伝意。会大論文之意未明乎（是二）。

次依大經文立真如縁起不然。仁王疏引涅槃經今文而。而釈曰。依無所得真性起有所得妄想（文）。明依持見（是三）。次凡自宗意。依中百十二門論涅槃大品明於諦義。且中論云。諸法性空世間顛倒謂有。於世間人為実。名之為世諦等。更不言性空之理依顛倒之縁成世諦妄法乎（是四）。如何。（日本大藏經 新版）第六一巻・三二八下 三二九下、括弧内は同本の割注）

すなわち、ここで難者は、前の『勝鬘宝窟』の「四別」中の第三句目が「真如縁起」を明かしているとする道理は未だ

明らかかなものであるとはいえず、同所で「縁起」の道理を明かしているとはいってもそれは「真如依持」の趣旨であつて、「真如縁起」の旨を説いたものではないとし、それが証拠に同じ「宝窟」の下巻では「依持道理」を明かしているではないかと述べてこれを論難している。さらに続けて、答者が「真如縁起」を説く明文として指摘する、「宝窟」が引用する「楞伽經」の文は、「真妄依持」「真性不転の義」を明かしているものであるとして、「大乘義章」「八識義」を引証し、「楞伽經」にいう譬喩をもつて「真如縁起」となすことはできないと結んでいる。さらにこれに続けて「大智度論」⁽²⁰⁾、「涅槃經」⁽²¹⁾、「中論」を引証して「真如縁起」説が成立しないことが主張されている。

これらの引用経論の中で特に重要なのは第三の論難である。「涅槃經」の文は「真如縁起」を述べた文ではないとする箇所であらうと思われる。「ここにいう『涅槃經』の文とは『判談集』でも問題とされていた「如来性品」の一文を指すことは、『真如縁起事』の前文から容易に知られるところであるが「ここで難者はさらに吉蔵の『仁王般若經疏』⁽²²⁾を引いて、『涅槃經』の文も「真如依持説」を説いたものに過ぎないことを強調している。つまり、難者の主張のポイントは、「真如依持説」と「真如縁起説」という二つを明確に分けるべきであるといふ点にあるのである。

これに対する答者の見解は、次のようである。

答。宝窟下巻云。然経論中积染浄縁起要有四別。一約縁不約仏性。二約仏性不約縁。三亦約縁亦約仏性。四不約縁不約仏性。「乃至」。三明亦約縁亦約仏性者。此亦如楞伽説。蔵識海常住。境界風所転。種種諸識浪。騰躍而転生。如海水起波浪。非異非不異。仏性亦爾。心俱和合生。亦非異非不異。如是一切法爾。故知真妄和合。方起染浄。海水起波浪非異非不異者。彰不可水外求波。波外求水。故言不異。

而波息水静。故言非不異也。仏性亦爾。心俱和合生非異非不異者。彰仏性と六七妄心和合生時。不可真外求妄。妄外求真。故言不異。而妄尽真顯。故言非不異。亦可在縁常静。故言非不異。法華論云。不即衆生界。不離衆生界。有如來蔵性。故縁云。仏性雖在陰界入中。而不同陰界入也（文）。

此文大師因积勝曇經顛倒真實章依持一段。広亘一代积於縁起。更不出四別。故云然経論等也。就四別初三句明縁起用門。第四一句明不生体門。故云泥上三門帰本一絶也。

（同前・三三九下 三三〇上、括弧内は同本の割注）

まず、「ここで答者は問題となっている『宝窟』の原文を長文に亘つて引用して見せたあと、この文は大師（吉蔵）が『勝曇經』「顛倒真實章」の「依持」の一段を釈することによって

広く一代にわたって「縁起」を解釈したものであるといひ、「四別」中の最初の三句は縁起の用門を明かしたものであり、第四の一句は不生の体門を明かしたものであるとしている。そしてさらに、それゆえ「宝窟」には、「泝上三門、帰本一絶」⁽³⁾（大正蔵三七・八四上）とあるのであると主張している。さらに続けて答者は、次のように語を継ぐ。

就初三句。一義云。初明因果相生縁起。此旨巨大小。則如毘曇成美法相所談也。次句明真如縁起。故云一約仏性不約縁也。第三句明真妄和合。則真如隨妄縁起染淨諸法（二云云）。一義云。就第三真妄和合撰妄從真云唯真。是則第二句。撰真從妄云唯妄。則第一句也（二云云）。一義云。第一句如第一義。大小所談因果相生方。第二句明依持。則明依真起妄真不成妄也。第三句明真如縁起。則明真隨妄真則成諸法也。今用第三義也。凡依持縁起一体義分明也。所以者何。就一箇真如有不動無礙徳。不動故依持而不成諸法。無礙故隨縁能成諸法。不礙自性。譬如一水備動不動二義於一虚空有不動無礙二義也。故浄名玄略述二末云。如一湿体以波取之名為動濕。以性取之名不動濕。此二中間無別湿体（文）。又大乘玄論第三云。譬如虚空不動無礙（文）。方是意也。故禪那伝云。依持縁起義恒俱也（文）。依之宝窟依持義云。如有海水風吹成浪非是海水令其成浪（文）。言縁起方如今釈云。海水起波浪非異非不異者。

影不可水外求波波外求水。故言不異。仏性亦爾。心俱和合生。非異非不異者。影仏性と六七妄心和合生時。不可真外求妄妄外求真故言不異（文）。爾者隨望如此釈成重出例如水依火成湯。是縁起方。猶亦如依寒縁成冰是也。爾以湯燒身。非湿性燒之而火性燒身也。濡身燒身故是依持也（は一）。

次大論文依持一辺且始是釈乎。將又自本明十八空還滅門不一之方。何強為難勢乎。既於縁起上備非異非不異二義。此則縁起之意也（是二）。

次大經文。大師或釈依持。或釈縁起。其旨楞伽文。自本依持縁起義恒俱故也。華嚴香象起信疏出真如縁起証文云。又經云。仏性隨縁成別味等。此豈不然乎（是三）。

次就於諦門至違中論云難者。諸法性空之理依世間顛倒之妄縁成世諦諸法。妄縁止時還本性空。故大乘玄第二云。明本性是空。但遇縁故有。有止還本性。故言性空也。爰以金光明疏云。專無明之体。即是真如淨心。何処別有無明体。故以假名無明。猶如波浪離水無別也（文）。真如成無明。故專其体全是真如也。云有止還本性。其意同也。就中波浪離水無別之釈。是明鏡也（是四）。真如縁起道理旁成乎。（同前・三三〇上 三三一上、括弧内は同本の劃注）

まず、ここで答者は、初めの三句の解釈に「三義」があることを紹介し、自身は「真は妄に随い、真は則ち諸法を成す

る「ことを明かして「真如縁起」を説いているとする第三義を用いることを表明する。その理由として答者は、無礙なるが故に縁にしたがって能く諸法を成じ、自性を礙げないのであるから、およそ「依持」と「縁起」が一体不可分であることは明らかであるといひ、さらに自説を正当化するために『浄名玄論略述』²⁴、『大乘玄論』²⁵、「禪那」²⁶等の説をその論拠とする。

ついで答者は、前に難者によって提出された論点それぞれについて反論しているのであるが、注目されるのは「味菓の比喩」を説いた『涅槃經』²⁷、「如来性品」の文²⁸に関して、これを大師(吉蔵)はあるいは「依持」と解釈し、あるいは「縁起」と解釈すると述べて、「依持」も「縁起」も本来は一体であるとし、さらに「真如縁起」「仏性縁起」を説いている論拠として法蔵(六四三・七二二)の『起信論義記』に言及していることである。『起信論義記』には次のようにある。

非異門者有三種。一以本從末明不異。經云、如来蔵是善不善因。能遍興造一切趣生。乃至下云。若生若滅等。梁撰論中亦説。此識虚妄是其性。故説虚妄分別所撰也。又經云、仏性随縁成別味等。(卷中本、大正蔵四四・二五四下 二五五上)

ここで『義記』は、「經云」として問題となつている「一味菓の比喩」の説かれる『涅槃經』²⁷、「如来性品」の一文を「仏性

随縁」と取意して引用していることがわかる。また、同じく『義記』巻中本に「今以二門略辨。一総明二別説。總者、原夫心性離念。無生無滅。而有無明迷自心体。違寂靜性鼓動起念。有生滅四相。是故由無明風力。能令心体生住異滅從細至麁。經云、仏性随流成種種味等」(同前・二五七上)とあるのも同じ趣旨である。なお、「仏性随縁」の言葉は、淨影寺慧遠(五二二・五九二)の『大乘義章』²⁹等にも見られるから、おそらくはそのあたりが初出なのかもしれない。

それはともかく、法蔵が「真如随縁説」を称揚し、のちの中国・日本の仏教界に大きな影響を与えたことは周知の通りであるが、ここにこの時期の三論宗における仏性解釈にも『起信論義記』の解釈が色濃く影響を与えていたことが推知されるのである。このことについては、のちに再びふれよう。ところで、さらに答者は「中論」³⁰、『大乘玄論』³¹、『金光明經疏』の「無明の体を尋ぬれば、即ち是れ真如淨心なり。何かなる処に別に無明の体有らんや。故に仮名を以て無明と名づく。猶お波浪の水を離れて別無きが如し」(大正蔵三九・一六五下)を引証し、とりわけ『金光明經疏』の「浪波(波浪)水を離れて別無し」の釈は「真如縁起」の明鏡であり、それゆえ「真如縁起」の道理はみだりになされたものではないことを強調している。もちろん、答者の引証する経や論書の本来的文脈において、「真如縁起」が説かれているか否かは別の

次元の問題であり、答者の見解にはやや強引に過ぎた解釈も目立つが、ここでは答者の指摘する事実のみを記すにとどめておきたい。

(三)

上記のような答者の見解を踏まえて、『真如縁起事』には三論宗のいかなる先匠が「真如縁起説」を説いたのかを問う、次のような問答がある。

問云、今將立真如縁起。自宗先匠誰存此義乎。如何。

答云、禪那院（名教鈔第三八識義）云、仙光院云、梨耶二分。一生死根本為第八。二涅槃根本為第九（云云）。撰論第四云、対治起時離本識不淨品一分。与本識淨品一分相応名為転衣（云云）。義章云、第八識中有二分。即真与妄。妄為生死本。真為涅槃本。又真識中分取心体清淨為第九識。水有可起淨用義為第八。又於真心具有染淨二用。雖有多義只是梨耶之差別耳（云云）。又云、宝窟下云、然經論中積染淨縁起要有四別。一約縁不約仏性（乃至）。二明約仏性不約縁（乃至）。三明亦約縁亦約仏性（乃至）。四不約縁不約仏性（乃至）。此明六七為妄識第八為真識也。又宝窟云、問云、若由仏性得種衆苦。即是仏性令物受苦。此乃是於魔性。何名仏性。答、此乃明有仏性衆生故得種苦。非是仏性令其種苦。亦明有仏性衆生令其厭苦。非是

仏性令其厭苦。如有海水風吹成浪。非是海水令其成浪。問、起信論説真如体無習云、恒常無習。以有無習力故。能令衆生厭生死苦染求涅槃（文）。今云非仏性令其厭苦。豈不違乎。答、義記下巻解不種衆苦不得厭苦云、明其離真妄即無用。二師意同也。欣厭正是安心之用。而必依真。此有此用耶。問、若爾者但有依持義。而無縁起義歟。答、依持縁起義恒俱也（文）。

仙光院第八識中有二分。如淨影存真妄共相梨耶歟。淨影大師出此識縁起義也。隨勸宗釈。宝窟云真妄和合方便染淨。評共相識存真如縁起也。禪那意又出依持門釈会之云。依持縁起義恒俱也。此師存此義。其旨如前重也。加之然拳向師存真如縁起。依之今宣其趣也。（同前・三四三下三四四上、括弧内は同本の割注）

一見して明らかかなように答者の見解は、その大部分が禪那院すなわち珍海（一〇九一一二五）の『三論名教抄』からの引用によって占められている¹⁰。そして、その記述中では「起信論」の「真如無習説」、それを釈した『起信論義記』の説が「真如縁起説」の重要な論拠として用いられていることがわかる。『起信論』自体が「真如縁起」「真如隨縁」を説いているか否かについては議論のあるところであるが、ともかくも珍海は『起信論』および『起信論義記』の説にもとづいて吉蔵の『勝鬘宝窟』には「真如依持」「真如縁起」が説かれている

と見なしており、答者はこの珍海の見解、さらに仙光院(元興寺智光、生没年不詳)、淨影寺慧遠の釈にしたがつて吉蔵の『勝鬘宝窟』に「真妄和合」「方便染淨」といつているのは相の識を評したものであり、それらの義には「真如縁起」の意があるとし、さらに珍海の意も「依持門」の釈を出したものであって、これから「依持」「縁起」がつねに一体として説かれることは明らかであるとしている。そのみならず、然・普の両師もともに「真如縁起」の義を有していたといっている。

続いて『真如縁起事』は、当時の三論宗内の「真如縁起」をめぐる各師の「許」「不許」について筆を進めているが、それについては島地博士がその概略を紹介されているので参照されたい。⁽³⁴⁾さて、「」で注目されるのはその記述中の最後にある次のような証言である。

加之古到木幡上人之処問宝窟四句之心。故迴心上人云

初三句縁起。第四不縁起。是宗実義也。但第三是真如縁起也。而非宗本意。是第四本不生義宗正意也(二云云)。定

春云。故兼信存此旨。是殊勝事也(三云云)。(三四三下)

すなわち、これによれば、木幡の迴心上人はこの問題の出発点となった吉蔵の『勝鬘宝窟』巻下之末、経論の中に染淨縁起を釈するに要は四別あり」の四句について、確かに初めの三句は「縁起」を明かしたものであるが、第四句目は、不

縁起」を明かしているものであり、上記から『宝窟』が「真如縁起」を明かしていることを見ることは可能ではあるものの、それは三論宗の本意とはいえず、あくまで三論宗の正意は「不生縁起」を明かした第四句目にあると主張していることがわかる。なんとも複雑で錯綜した見方のようにも思われるが、これが『真如縁起事』の著者の結論的見方であるらしいことは、本書の冒頭に次のように付文されていることから推知されるのである。⁽³⁵⁾

三論一家意。空華開落任羈疾縁。虚空体性都無動見候間。

不可成真如縁起。会有非一非異二義中非一一辺(同前・

三三七上)

では、『勝鬘宝窟』の原文そのものにおいては、上記の問題はどのように判断すべきなのであるか。

(四)

問題となっている『勝鬘宝窟』巻下之末の「経論の中に染淨縁起を釈するに要は四別あり」とする箇所については、幸いなことに早くに鶴見良道氏による一連の詳細な研究⁽³⁷⁾があり、後学のもの裨益してくれる。慧遠の『勝鬘義記』の解釈をも視野に入れて、吉蔵と慧遠の比較研究を試みられた鶴見氏の研究成果に拠れば、問題となっている「染淨縁起四句分別」の第三句目は慧遠の立場に相当するものとされ、第四

句目が「諸法実相」を主張した吉蔵の立場であるといわれている³⁸。したがって、これに従えば、三論宗の正意は「不生縁起」を明かした第四句目にあると主張した前の木幡の廻心上人の解釈は、それなりの説得性をもっていたと評せるであろう。また焦点である第三句目が慧遠の解釈に相当するものであったとすると、この句をもつて、「真如縁起」を明かしていると見なしてきた従来の解釈も見直される必要があるということになるであろう。

ところで、吉蔵が『楞伽經』を引用して、如来蔵・仏性をもつて染法・淨法の「依持」としていることは明らかなことである。なぜなら、『宝窟』には次のようにあるからである。

所以攀此七法者。攀六識。明不能起染淨及以種苦。攀心法智。明不能厭苦染涅槃。故楞伽說六七不受苦染非涅槃因也。六七不受苦染者。猶是不種苦。非涅槃因。猶是不厭苦求涅槃也。待至後釈。(巻下末、大正蔵三七・八三下) そもそも「染淨依持」という言葉は、『勝鬘經』自体にはないもので、經にあるのは「世尊。断脱異外有為法依持建立者是如来蔵」(大正蔵二二・二二二中)というように「依持」の言葉があるだけであるが、吉蔵は前述のように經の解釈にあたって「染淨依持」の概念を導入し、「待至後釈」とされる箇所では、これを次のように述べているのである。

問。由仏性故得厭苦染求涅槃。此事可爾。若由仏法性種

衆苦者。豈非仏性力故令衆生種生死苦。若言不由仏性力種生死苦。亦応不由仏性力染求涅槃。又若不由仏性力種衆苦者。即是七法種苦。云何言七法一念不住不得種衆苦耶。

答。須解此章大意。此章為破外道二乘人不知有仏性。欲勸一切衆生信有仏性。故說由仏性故得厭衆苦染求涅槃。問。勸信之言有餘。而釈經意不足。若由仏性得種衆苦。即是仏性令物受苦。此乃是同於魔性。何名仏性。

答。此乃明有仏性衆生故得種衆苦。非是仏性令其種苦。亦明仏性衆生令其厭苦。非是仏性令其厭苦。如有海水風吹成浪。非是海水令其成浪者。

問。若非海水使成浪。風吹成浪者。亦非非仏性種苦及厭苦。但顛倒妄緣種苦及厭苦。則違前文。

答。雖因風成浪。終由有海。雖因妄心種苦及厭苦。終由有仏性。故說仏性為本。故說由仏性故種苦厭苦也。(同前・八四上 中)

引用原文記述後半の問答では、もし仏性に由つて多くの苦を植えることができるというならば、仏性が衆生に苦を受けさせるということになり、これでは魔性と同じではないかという問いに対して、吉蔵は仏性が衆生に苦の種を植えさせるのではないとした上で、最終的には仏性が有るから苦(と感ずること)があり、苦を厭つことがある(=涅槃を求めるこ

とがある)として如来蔵「仏性を「染」「淨」の根本として

るのである。私はかつてこの『勝鬘宝窟』の一連の記述をもつて、「こつした吉蔵の立場は、後世の言葉でいえば、いわゆる「真如随縁」的理解⁽⁴¹⁾ではないかと述べたことがある。いまになってみると、その理解は厳密さを欠いたきわめて曖昧なものであったと反省されるのであるが、ただ「宝窟」における吉蔵の解釈や、『勝鬘經』のいわゆる「染淨依持説」を説いたと見なされる一文が、『宝性論』に引用され、さらにそれを介して『起信論』まで受け継がれているという事実を思うとき、そこには何か一貫した思想の流れがあったのではないかと

思うのである。また、天台智顛における『勝鬘經』の引用例を精査された藤井教公氏による、次のような指摘も忘れてはならない貴重なものであったといえよう。

智顛はその著作中にこの染淨依持説については筆者の検討した限りでは全く言及していない。このことは、智顛の本經の如来蔵説に対する理解と受容の著しい特徴である。

また、同時にこのことは智顛がその著作中に『大乘起信論』を一度も引用していないことと完全に軌を一にしている。これは結論を半ば先取りする格好になるが、智顛の如来蔵理解の基本的態度として、如来蔵の実体的把握を徹底的に排除しようとする態度が見られる。それは

鎌倉期三論宗における「仏性縁起」解釈について(奥野)

『大乘起信論』によって如来蔵縁起を説いた地論宗や、九識説に立つて阿梨耶識縁起を説いた摂論宗に対する智顛の厳しい批判によっても裏付けられよう⁽⁴²⁾。

明らかに吉蔵の場合とは際違った異なりがありきわめて興味深い指摘であると思われる。このように見てくると、「依持」と「縁起」、「依持」と「随縁」等、その概念を明確化せずこちゃ混ぜに用いていたという欠点はあるにせよ、本稿で瞥見した鎌倉期の三論学者の仏性理解もあながちすべてが的外れとは言えないようにも思われるのである。しかし、吉蔵が「仏性依持」という考え方に対して否定的見解を持っていたことは事実のようであり、その点はしっかりと認識しなければならぬのである⁽⁴³⁾。鎌倉期三論宗の仏性理解が時代の要請によるものであったのか、あるいは吉蔵の著作から導き出されるものかはいましばらく慎重に判断してみたいと思う。論じ残した問題は多いが、それらを課題としてひとまず本稿を閉じておきたい。

注

- (1) 『国書総目録』第三巻によれば、『三論宗判談集』の名を持つ写本としては、龍大本の他に文化十年(一八一三)筆写の高野山持明院本二冊があるという(同上目録、八七一頁)。
- (2) 龍谷大学図書館請求記号「264.2/13-W」、「264.9/1-W」、「264.9/2-W」の三種。『三論宗判談集』は三巻よりなるが、龍大本所蔵本はいずれも一冊本。また、請求記号「264.9/

「三」の写本は上巻のみの端本である。なお、龍谷大学図書館所蔵の三論宗関係の文献については、拙稿「龍谷大学と三論教学」、『駒澤短期大学仏教論集』第八号、二〇〇二年十月）において少しく関説したことがある。

- (3) 前注(2)に記したように龍大本『三論宗判談集』は三巻よりなるが、『八幡宮勸学講一問答抄』は上・下の二巻構成となっている。その内容が三論教学上の主たる問題、百八十條を初・中・後に分けているところから推量すれば、本来は二巻構成であったものを初・中・後に合わせて三巻としたものと思われる。

- (4) 奈良時代に九州の宇佐八幡宮より東大寺守護の神として勧請されたという手向山八幡宮の現在地は、奈良市雑司町四三四である。

- (5) 島地大等『日本仏教教学史』（明治書院、一九三三年）二七三頁参照。なお、この島地書に対する評価の一端については、伊藤隆寿「三論学派と三論宗 三論思想史の研究課題」、『駒澤大学大学院仏教学研究会年報』第一号、一九八一・二、特に二八 三〇頁の記述を参照されたい。

- (6) 現行の『日本大蔵経』所収の『八幡宮勸学講一問答抄』には、次のような奥書がある。

「右写到上下二巻書、依此功德、生生世世、為仏法機因、如是、寛永十年十月廿五日 三論宗学 実快（生年十六歳）相伝 遵性。

三論末学、総別読師、兼出世後見參河法印 権大僧都 庸性。

右一部二巻、書写之功德、願者奉擬父母師長安樂也。多度郡白方村、於宝光精舎、写得畢。文政九年七月廿五日 西讀伊舎院末資万福寺住職 法山房（『日本大蔵経 新版』第六巻・一二五—一二六頁）

- (7) 『日本大蔵経 新版』における花山信勝博士の「解題」を参照（『日本大蔵経 新版』第九八巻、六七—六九頁）。なお、花山博士の「解題」は多分に島地博士の『日本仏教教学史』における記述を参照しているようである。

- (8) 島地前掲書二七三—二七四頁参照。

- (9) 鎌倉時代の三論教学を扱った論文としては、以下のものがあるが小稿が扱う問題については触れられていない。平井俊榮「鎌倉時代の三論教学」、『金澤文庫研究』第二六九号、一九八二・九）、大西龍峯「鎌倉期三論学と禅宗」、『駒澤大学仏教学部論集』第一六号、一九八五・一〇）

- (10) 『大般涅槃経』卷第八「如来性品」に「如是一味菓。隨其流処。有種種異」（大正蔵二一・六四九中）とあるを参照。

一味菓の比喻は、周知のように三論教学の大成者である吉蔵がその著書中しばしば用いるもので、さらにこの比喻は松本史朗氏がいわゆる“*dhātu-vāda*”の典型であるとして、批判的考察をなされたものでもある。それらについては、平井俊榮「中国般若思想史研究 吉蔵と三論学派」第二篇第三章第四節「吉蔵における涅槃経引用の形態と特質」の特に「二、頻出引用句について「および」「三、涅槃引用句の思想的意義」（春秋社、一九七六年）、松本史朗「三論教学の批判的考察 *dhātu-vāda* と じつ の吉蔵思想」（平井俊榮監修

『三論教学の研究』春秋社、一九九〇年、後に松本『禅思想の批判的研究』大蔵出版、一九九四年に再録）を参照されたい。

(11) 島地博士も前掲書の中で、次のように解説している。「即ち真如には、不守自性の義と、不失自性の義との二義がある。若し真如不守自性の立場からすれば真如は万有を回転する主体たる可きものであるが、若し不失自性の立場からすれば自性を失はざるが故に真如は縁起せざることとなる。而も此の二つの方面は本来一体であつて、その完全に調和されたものが真如であると解するのである。」(二七四頁、傍線部) 奥野)

(12) 島地前掲書三〇七頁以下参照。島地博士は本書を、鎌倉時代に於ける三論教学を代表する最後の著作」としている。論じられている内容を比較してみると、『三論宗判談集』が『三論真如縁起事』に先行することは疑いないところである。なお、本書の著者は若城寺光大法師とされるが、その詳細については不明である。本書は、『日本大蔵経(新版)』第六一巻、『三論宗章疏二』に収められ、花山信勝博士が「解題」をなしている(『日本大蔵経(新版)』第九八巻、六四、六五頁)。それによれば、『日本大蔵経』所収の『三論真如縁起事』は、正中三年(一三三六)二月貞然の再治したものを、享保七年(一七二二)二月高野山妙瑞の『統宗義決撰集』の巻尾に校訂付刻したものである。しかし誤脱が少なくないので、故島地大等師珍藏の秘冊を底本としてさらに刊本と対照し、その異同を割注として出版された」といふ。

鎌倉期三論宗における「仏性縁起」解釈について(奥野)

(13) 前注(12)花山「解題」も指摘しているように引用書目は、現行の『日本大蔵経』所収本の冒頭に列挙されている。

(14) 鎌倉時代を代表する「三論」の学者である珍海の『三論名教抄』、『三論玄疏文義要』(いずれも大正蔵七〇巻所収)も吉蔵の著作を初めとした多数の経論からの引用によって構成されている。こうした傾向は宗派を問わず、この時代の文献に共通した傾向のようである。

(15) 本文に引用した『三論真如縁起事』は前文にある次の問答を受けたものである。傍線を付した箇所が、『三論宗判談集』の記述を受けたものであることは明らかであろう。「難云。凡空華開落雖任鬻疾之縁。虚空之体性都無動。諸法之生滅本依妄謂之情。何強云真如所起乎。爰以大論中云無為相者則非有為(文)。大師解釈云。如空華眼病故見空花。無有一異無花故不得言与空一体(文)。如解釈者。不許真如縁起見。若依之云不許者。宗家一処釈中引楞伽藏識海常住境界風所動(異作転)之文。釈真妄和合方起染淨。無許許真如縁起見乎。若答者一片云縁起者。直可難縁起之由。答。凡真如縁起之事。月氏及異義。震旦又分流。但自宗意。大師広依縁論意。釈染淨縁起起出四別。其中第三是真如縁起也。其釈如一辺難勢。故宝窟云。如楞伽説(以下略)。(『日本大蔵経(新版)』第六一巻・三三七下、三三八上)

(16) 難者の引く『勝鬘宝窟』の文については、同書巻下末大正蔵三七・八四上)を参照。

(17) 『楞伽阿跋多羅宝經』卷第一(大正蔵一六・四八四中)を参照。

- (18) 『大乘義章』卷第三、「八講義」（大正蔵四四・五三二下）を参照。
- (19) 『大智度論』卷三二（大正蔵二五・二八九上）を参照。
- (20) 『中論』卷第四（大正蔵三〇・三二下 三三上）を参照。
- (21) 『三論宗真如縁起事』の前文に、「大経疏釈是一味業隨其流処有六種味之經文云。衆生薄福修行断常生滅等因。致令仏性成六種味（文）。是豈非云仏性一味之業縁起成六道種味乎」（同前・三二八上）とあるを参照。
- (22) 吉蔵『仁王般若經疏』巻中に、「初云衆生識初一念識異木石生得。善生得惡惡為無量惡識本善為無量善識本。乃至金剛菩薩者解者不同不能具出。今且依經以釈。涅槃經云。如雪山菓如是一味隨其流処有種種味。其菓真味停留在山猶如滿月。合譬云一味者譬仏性。以煩惱故出種種味所謂地獄畜生等。今謂一味者即是無所不二之真性也。復云如是一味隨其流処有種種味異者。依無所得真性起有所得妄想。即成無明煩惱起業成六道報也」（大正蔵三三・三三七下 三三八上）とあるを参照。ここにいう「無所不二之真性」とは「仏性」と同意である。
- (23) 大正蔵三七・八四上。但し、『宝窟』原文では、「帰乎一絶」となっている。
- (24) 『浄名玄論略述』巻第二末に、「一云。第九講外無別第八解性。唯一解性以性取之是常法。故名為第九。隨縁取之是生滅。故名為第八。此二中間無別解性。如一湿体以彼取之名為動湿。以性取之名不動湿。此二中間無別湿体」（『日本大蔵經（新版）』第一四卷・二九七上 下）とあるを参照。なお、『日蔵本』に「湿」と改めた。
- (25) 『大乘玄論』巻第三に、「理用円寂名為涅槃。如此諸義如喻似何譬。如虚空不動無礙有種種名。雖有諸名実無二相。以是故。云名字雖異理実無二也」（大正蔵四五・四二上）とあるを参照。
- (26) 醍醐寺禅那院・珍海の「三論名教抄」巻三に、「問。若爾但有依持義而無縁起義歟。答。依持縁起義恒俱也」（大正蔵七〇・七二〇上）とあるを参照。
- (27) 前注（10）を参照。
- (28) 例えば、『大乘義章』巻第一（大正蔵四四・四八二中）には「仏性縁起」の語がある他、同巻第一（同・四七七中）には「仏性隨縁」の語がある。石井公成氏は慧遠が「隨所で、仏性縁起」などの語を用いて発生論的な議論を展開すること指摘している（石井「華嚴思想の研究」第一章「地論宗における『華嚴経』解釈」六三頁、春秋社、一九九六）。また、荊溪湛然の『金剛錍』には、「真如隨縁即仏性隨縁」（大正蔵四六・七八三中）の語がある。なお、慧遠の依持、縁起説に關しては、吉津宜英「浄影寺慧遠の縁起説について」（『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第六号、一九七四・八）および同「慧遠の仏性縁起説」（『駒澤大学仏教学部研究紀要』第三三号、一九七五・三）を参照。
- (29) 前注（20）を参照。
- (30) 『大乘玄論』巻第二に、「次釈性空意者。然有無所以得有諸法。意無礙者正由有空故爾。今須釈性空。亦是多意。但

その真意は迴心上人の口伝の如く第四本不生義を宗の実義と成するのである。思ふに、当時は比叡及び高野系統の一乘仏教の教学に影響された結果として、真如縁起説を三論教学の内容として肯定しなければならぬ情態にあつたらしい。随つて当然此の説を肯定す可きであつたけれども、此の著者は木幡の真空中觀上人の説に實じて本不生の説を以て三論正統の説なりとし、真如縁起説を異端として排斥せんとしたものの如くである。これも時代の新思想たる禪に影響され、百万の味方を得たやうに感じてその正統を主張したものである。三論は本来、縁起思想に根拠するものでないことは言ふ迄もない。然るに嘉祥大師が、『勝鬘經宝窟』の中に第三真如縁起、第四本不生を説いた為、後世の三論学者がこれを三論の思想として取り入れんとしたのである（前掲書三〇七—三〇八頁。傍線部「奥野」）。島地博士の理解は三論は本来「真如縁起説」ではないものの、『勝鬘宝窟』では「真如縁起説」を説いているため、後世この説が三論の思想として認定されるようになったといふものである。

(36) 『日本大藏經（新版）』の「解題」中において、花山信勝氏は次のように述べている。「本文に入る前に、『三論一家の意は、空華開落するは、翳疾の縁に任せ、虚空の体性は、都て動くこと無しと見候あいだ、真如縁起を成す可からず。会するに、非一と非異の二義ある中に、非一の一辺なり」と付文されている。これをうけて論文の終局には、「一応（勝鬘）宝窟』によつて縁起を成立したけれども、宗の真意は迴上上人の口伝の如く四種縁起の第四本不生義を以て実義とするも

のである」と述べている。当時は比叡と高野の一乘仏教の教学に影響された結果として、真如縁起説を三論教学の内容として肯定しなければならぬ情態にあつたらしい（同九八卷・六五頁）。

(37) 鶴見良道『勝鬘宝窟の染淨依持説 淨影寺慧遠、勝鬘義記』と比較しつゝ、「（駒澤大学仏教学部論集）第六号、一九七五・一〇）、同『勝鬘經の「六識及心法智」』（印度学仏教学研究）第二四卷第一号、一九七五・一二）、同、『勝鬘宝窟の研究』（曹洞宗研究員研究生研究紀要）第八号、一九七六・九）

(38) 鶴見前掲『勝鬘宝窟の染淨依持説 淨影寺慧遠、勝鬘義記』と比較しつゝ、「一三七頁参照。

(39) 前注（38）を参照。

(40) 藤井教公氏はこの「依持」という語が慧遠の師の法上の『十地論義疏』の中に見られるところから、慧遠以前の地論宗の中で用いられたものであると指摘している。藤井教公「天台智顛の実体論批判」江島惠教博士追悼記念論集、空と実在（春秋社、二〇〇一、二五二頁）を参照。

(41) 拙著「仏性思想の展開 吉蔵を中心とした」法華論』受容史』第四章「吉蔵と仏性思想」（大蔵出版、二〇〇二年、一七九頁）を参照。

(42) 『究竟一乘宝性論』巻第四「無量煩惱所纏品」に「世尊。依如来蔵故有生死。依如来蔵故証涅槃。世尊。若無如来蔵者。不得厭苦染求涅槃。不欲涅槃不願涅槃故。此明何義」（大正藏三一・八三九中）とあるを参照。

(43) 『大乘起信論』に「(五者聞)修多羅説。依如来蔵故有生
死。依如来蔵故得涅槃」(大正蔵三三・五八〇上)とあるを
参照。

(44) この事実については、高崎直道『大乘起信論』の語法
「依」「以」「故」等の用法をめぐって」(『早稲田大学大
学院文学研究科紀要』第三七輯哲学・史学編、一九九二)を
参照されたい。

(45) 藤井教公「天台智顛と『勝鬘經』」(今西順吉教授還暦記
念論集『インド思想と仏教文化』春秋社、一九九六、四一七
頁)を参照。藤井氏はさらに「しかし、空・不空如来蔵や如
來蔵の染淨依持説という経の特征的教説については引用、援
用の跡が確認できず、智顛はこれを受容していない。如来蔵
説については、智顛は『勝鬘經』よりも『涅槃經』の所説に
依拠しているといえる。これは根本的には智顛の思想の根底
に空思想があり、それが一切の実体的把握を拒ませているこ
とに由来すると思われるが、直接的には智顛が経の如来蔵の
染淨依持説が『大乘起信論』の如来蔵縁起説の淵源になって
おり、そこに如来蔵の実体的側面を見たからであると考えら
れる」(同論、四二一、四二二頁)とも述べられる。なお、智
顛の実体論批判については前注(40)の藤井論文を参照。
(46) 『中觀論疏』巻第六本に「六者自上已來破生死中仮人造
作義。此之一品の破大乘人謂世出世仏性依持。則是拳始終世
出世也。如大乘人之言。本有如来蔵為生死依持建立。生死則
依如来蔵名為本住」(大正蔵四二・九二上)とあるを参照。こ
の文章を私はごく最近まで見落としており、したがってこの

文章の持つ意味をよくよく吟味しなければならぬと思っ
ている。

(二〇〇四年七月二日)